Martin Dulaey, 'L'apprentissage de l'exégèse biblique par Augustin. (1) Dans les années 386-389', *Revue des Études Augustiniennes* 48 (2002) 267-295.

上 村 直 樹

アウグスティヌス (= Aug.) の初期、387 年から 389 年にわたる著作のうちに見いだされる旧約聖書への註解を分析することによって、ミラノ、ローマに滞在した時期をとおして Aug. が聖書研究に専念したことを立証する。旧約聖書を読解するにあたって、いかなるテクストを用い、先行するキリスト教著作家の釈義を助けとしたのか。著者は Aug. が聖書を利用した方法を概括するよりはむしろ、回心につづく時期に自らのものとした先行教父の釈義を教示するテクストを分析することを論述の主題とする。ただし、Aug. と先行者との共通性を認めるだけでは、両者が独立に同一の解釈に逢着したという可能性を排除できない。それゆえ、この時期の著作のうちに先行の註解と一致すると見なされる箇所を探索するにあたっては、四世紀にいたるまでに確立された釈義の伝統を可能な限り多くの著作をとおして追跡する必要がある。まず、聖書解釈を主題としない初期著作、*De libero arbitrio* lib. I-II, *De moribus*, *De magistro* を踏査し、旧約聖書に関する引用の源泉に焦点を当てる。ついで、アフリカ帰還後 388-389 年にあらわされた *De Genesi contra Manichaeos* に集中し、全二巻の註解を冒頭から検討することによって、実際の源泉を明示しようとこころみる。そして、アムブロシウスのいくつかの論考の影響が卓越していること、第一巻ではとりわけ *Hexameron* に、第二巻では *De paradiso* に依拠していることが諒解されるとともに、アムブロシアステルの影響もいくつかの点で明白になる。さらに、Aug. に利用されたと推測される著作家たちが枚挙され、フィロンについてはその影響が疑われるが、一方、テルトゥリアヌス、オリゲネスのラテン語訳、キプリアヌス、ラクタンティウス、ノヴァティアヌス、また、おそらくは Victorinus episcopus Poetovionensis の散逸した註解、或る散逸した Onomasticon を Aug. が参看し、受容したと考える。